本多

藩鑑

七十六

内閣文庫
和書
三四六八二號
二八冊
一五九函
一一二架

内閣文庫
番號 和 34682
冊數 278 (77)
函號 159 1

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑巻之百二十目録

伊郡之十二

本多出雲守藤原忠朝

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

藩鑑卷之百二十

本多

出雲守藤原忠朝（ともの）ハ中務大輔忠（たゞ）
勝（かつ）ノ二男（ノ）ニ〻して　免内記と称す
慶長六年正月忠勝ノ上総國大多
喜を改て伊勢國桑名を賜ひ
とき舊領のうち五万石を忠朝（みの）

賜ハ元和元年大坂再亂のとき五月七日戦死也歳二十四なり　孫八郎公清勝君

慶安三年六月卒し嗣子なくして家絶す

一源君伏見ハ市庭かさりしときいとこ共もなくさハゝし何事をとゝ人をみせりつゝをされたまとも實説知れかし時ハ太多出雲ハ十四歳のよろなり出雲ハ私宅近噪くゆゑを師尊なる雲州

不の相撲ゝ場まて馬をハゝしゆ是に依て噪ぎ出雲中上る

源君たゝ祖ハつゝをされても知まゝかるきハ能聞しとけて家ゝ若年もの、迹ゝ奇特なりと感ぜめなゝす　武功雜記

一太多中務大輔忠勝病まて卒しる時家老松下河内ハ書置遺言ハ

濃守忠政ハ嫡子なれとも遺跡を後事
を方の命じ給ひ家督武具弓具兵具ハ
悉くこれを兄濃守に譲り
あり我黄金一万五千兵を貯へ置ぬ
次男出雲守忠朝ハ小身なれハ此黄金
を渡ハしとの遺言あり河内守事
を忠政より忠政乗色を指て親の
遺跡嫡子の命あり親の遺命
も亦嫡子の保つ所古今同したとい書
置たりとも何そ能理に同せんやとて
黄金を封して忠朝に與へ河内守
書置の趣を忠朝よりす忠朝我ハ
多あり金銀の用度をす濃州多
く士を扶持し民を賑す世の変あり
時ハ軍馬に費そとなくあり中務我
を愛し弱ハ期のことなくなと

を義とをいて愛る事家と云黄
金を取かゝ河内此国を以て忠政
と共に忠政此院を取て皆忠政と
あゝたなこゝろ忠朝うゝく辞して受
す忠政ハ父の書置遺ふゝとゝ
忠朝ハ次子ゝ家の財を当とすゝ
すと云て兄弟互ゝ譲る一門の人々
感して黄金を二つゝ分て半を忠

政半を忠朝ゝと定らまゝ此を忠朝
先ゝ裁判ゝ任せゝ主一家ゝ急用
あゝハ時ゝ当りて中懐屈きとして
封しを解ゝす忠政の義ゝ垂て当
を終るまて一金をも取ゝすとゝ

古老雜話
止戈談叢

一本多出雲守忠朝老臣春野何某に
戯まていをゝく武士ハ境界高名を

かして大禄を得るハ其身一人の
榮耀を極めんとおもふ者すなハ
かくのごとき太平の時に逢て福を
子孫に遺さんとおもふこの万人た
りとも同事なるべし其方も右の
如く存ずる武士と存ず春陽中当
ハ泰平なき事なれハ世の光の働き
花よ今日治平の勤も皆世恵の通り
に我子孫をもつて忠義の為に
身を尽すハ昔ハ古へよりなきこと
なり存しまるよしなす忠孝のい
たく人々の大切なるいとおもきこと
孫を能く教さるハ何事よりも多く
の人其分大禄を受れハ我身
職のときを忘れて子孫に榮耀を
奏らすすめ死して主君も

立あり家風大いに衰微して老功の
家来もちりぢりになりしかども事我等
おのおのより見たる事数多あり い
まし〳〵殿府の町人一子を指たるに其
子の為として一生をかせき百姿をかさね
てあるべき其為に死しけり此子業耀
に育ちて万金を費やすと思ふ年五
年の内に悉く人の費となりて終

に家を売りて乞丐となりぬるよし
町人の上に愚なりと云人あれども
武士も多く是に似たり人に子孫
に幸を遺さんとなすは数第一なりと
中されり此意能一子を指て大
に寵愛し当世の風俗に流るる者
人となり 太平将士義談

一 忠朝関原の戦に内記といひ十八歳

よりて忠勝より後ひ出陣せしめ之國
忠と共に後馬小勇り為津義弘宇喜
多秀家の大軍と戰ひたるも為津
り兵大砲を放ち忠勝の為あ
り馬負ち斃る梶金平勝忠ら
跳り其ら忠勝を奪せたり敵
兵是を見て大將の擊ると十
四五騎馳せ来り忠勝を圍み敵

内記無雙の大力あり父尋しめらる
まハ子死すと云て一番に駆寄
せ敵二騎を斬り曲りたる刀を鞍の
前輪に當て押し直し猶敵
大ひに辟易し敢て進み兵す其間
に後藤内記来り戰ひ敵を追ひ忠勝
を援ひ首九十餘級を得たるハ忠朝
の勇猛に因てなり　大三川志
小倉氏関原軍記

一関原に合戦辰の刻より始り午の刻まで
よ悉く
権現様に勝利を得られ桃配に本
陣を居置かせられ山岡伊賀守朝倉
喜津兵庫頭兵部に戦ひあされ切り
の五寸ほどに新八入石中山を指あ
されあるを見あけられ見届出
申へ

一
大三川志
本多家武功聞書
本多出雲守は高名仕り骨折
申と相見え武功に於て先祖を
恥らしめざるの儀に成あされ
不倉なることなくして成る遠ひ中
申あるとき見事なる蠟燭五百挺進
上仕り奇麗なるとて機嫌に秘

藏おされ置せ候とも其後此とゝ
に覽おされ申候ハ〻世うあしく見
うけて相違おりてこゝ有に意よい五方
石の身躰おて五百挺上るハ多過た
るて思召へとも見事よ仕り上ケ申
よつき此秘蔵おされ置せ候ハ処よ
見無をうを皆よ仕りともしてみ
さるハ不念おり他い表裏見あと

思召ハとてまよう御前あしく有
中山紀伊國物語
関根鐵郎物語

一大坂初の此陣よ本多出雲守諸取場
場三重ありて仕寄有りかきよし
中上る此意よ何とし て場三重ハ
とて此氣支損し此ハ叱おされる本多上野
笑止よ存し目くたせして退出き
する其以後作ハい此前よりおるまし

きと市意あり成る（きと中てい
さまし〳〵有てこそ彼るゝれ太閤の
ときより一つハ川のなられを仰入
て置たるを能市をん〳〵成さ迚ハに
堀り之重まて有すと我方より中
也市茶より市意成さる迚き也り是
なく中勝りるよりてハあるましくと
市此成されハ同上

一大多出雲守ハ殿と首尾よろしくす
して安念至極おもられ君臣の間
よ諚臣ありて侍衆を以て中上
ハいよ〳〵評判あしくなり居内
ゐとなく
将軍家の市出陣と仰出され居忠朝
ハ市先手の事有れハ市出陣ま二日先
達て發向す手勢都合四千人ま

及へりなをかく大坂表ハ出陣ありしかハ忠朝ハ天王寺和大門ハ陣を取時ハ此所ハ第一城へ遠く殊ハうしろハ堀切ありて馬のうけ場ハしく要害ならしとハいはれハ陣場を形間宮権右衛門瀧川豊前守へ入陣場哲のことを願ひ

神君此ことを聞ありて上意ありなハさすハ忠朝ハ不埒至極の者かなる大軍の陣を敷ハ然き取もあへき所ハ切所ハ難所もあへし凡名將ハ切所難所をもきらはすして名名ハむかし田村麻呂ハ鈴鹿山の嶮山ハして朝敵を退治し源義經ハ一の谷を越へて戦ひ或ハ佐木

の字治川の大河をうしてこそ
勝利を得名は後代に殘せしあり
忠朝の父忠勝は幾たびの度毎に
恐き面の傷を蒙み一言坂の後殿天
龍川長瀬川等の先陣伊賀越の
難所等よりて嚴しき戰をなし味方
の同志をおとろかし比類なきたてをき
せし者なりき忠朝は武勇氣性共に

父よりおとり劣るも兵法にもうとしと
見へたり除子は人なき地を得て望
み人のおよぶさる難所山川等を
經て勝利を得ることこそ中され
忠朝の振舞臆したる彼等の訴訟
武門乃かきんとはなるべきなり
作ありけまし忠朝この上意の趣
を聞いよ〳〵元念肝髓に徹して

し依て一日も早く討死して會稽
の恥をすゝんと願ふ度毎に必死
のたゝらきをなし名柄高名数度に
及ぶといへとも一度も
神君の賞賜を蒙すす大坂和
睦相とゝのひて
両將軍家の御凱陣ありしかは
忠朝先登を相勤めて帰府に及ひ

江戸表にをいて在國の由暇を賜り
しかは居城大多喜へ下り幽居し
て在りゝ只ひたすら安念を胸に
みちゝりとを聞えし　九六強勇記
一本多平八郎蝙子出雲守忠一
の男にして大力と相聞えし大坂冬
の陣に
家康公より急なる召れとの由知

あり出雲守殿是ハ此度の御意
なり此沼を何と越るとのゝ亟よ
中上屋くとて此所へ罷出其段申さゝ
此意に猛勢よ切所かしとい事
を考すや親よ常なる者ゝかし
作ゝる出雲守殿則此所を居立
親よ常なるとの御意の上ハ生て後
あり沼よ入ても死ぬるハ同し道
理とて打入ゝを見て三千餘の人数
ゝ一度よ打入たもい城よたけも
及なる沼なれとも何のさゝもかく
向よかけあるゝ其手よ敵出あ
ハねハ合戦ハかし家ゝんとあゝ
を家来とも程の袖にすゝとを
てめたり其後板よあり
西郷一郎様京都此逗留のうち材木

藏、ゟ六車あるとき焼死す面き覺
悟よて一足も云々す即時ゟ引きま
ゟとこそ聞えし　久程閑暇雑書

一元和元年五月大坂御陣の義忠朝
様へ太先を仰付られゟ太曽根家来を五出され
此度大名多く見あり小分の某
太先を仰付られ大坂ゟ思召ゟ弥

忠節をたけまし中屋きのよし聞と
太軍法号の儀仰付まゝ御出る故
さまゟ　本多家武功聞書

一元和元年五月再亂ゟ依て
西將軍家再び太進發遊あるよう
て相かゝす本多出雲ゟ忠朝を
〻先鋒と命せゟる忠朝此度こそ
死を決せんと与こひてやうて出陣

ある馬前へ例の金さし棒を十四人
ゝ持せ相陸ゝ面しゝ向坂内記山口
主水石川半弥紀井六兵衛柳田平兵衛
等を先として何も死を一途ゝ
きハめ出るときハ何れも妻子ハ水盃
をして出陣し候出雲守忠朝ハ家
老澤津李之助をまねきて申候
ハ汝等知ることゝ思まて候と

物軍家の士氣多を蒙り浪士の中
まて恥辱を物世上の人に白ひき
る事ハおもき次第なり既ゝ去る
の内陣ゝ対死して恥辱を雪んと思ひ
しゝたゝすも内和睦とありお意
を失ゝ処ゝ尚年再亂のおこる事
忠朝ゝとゝてハいかゝよろこんし
元ゝ家を出るとき妻子を忘る

ハ武士の常とハ言ながら此度ハ其一命
ハまさにおもひ切てあるべきハ汝よ
くくと遺言するあり降政勝ハいま
御く二歳戦死の跡にて小中と
家督相續志ゝ〻〻甲斐を聟
として大多喜五万石を納めて
次ハまゝ政勝よ附添て彼ら家人を
見とゞけ政勝國家を治る年ころ
ハも〻〻ゝかハ甲斐ゝ跡月をつゝせ
我ゝ血肉連綿とするやうにとゝ
願入処なり其ゝ此度ハ汝を國ゝ
残し置なりといひけるハ左ゝ助聞
なゝ涙を流し委細市淀の趣具ゝ
畏り奉ゝ此易く思ゝ左ゝ助ゝ
てゆへハゆも此ゝ光ひ拝ハ奉るまゝく
ゆゝ後合ゆまゝハ出雲ゝも安堵

てなとかく出陣あり　九六發動記

一忠朝軍を發するに隙んて兜れ立物の庶れ角是に落たり小性大原長五郎是を取て立んとす忠朝立る事一旬もとゝ制して立しめず常より用由り金のいとたれ数珠も掛けすて出つ其後馬先せて忠朝陣たるとき長五郎兜の庶れ角を立たり是時も早く必死の志を遂んと欲する形勢あて陣營を發す　太三川志

一七日の朝敵近寄て九山將監本多出雲守陣ゟ使目よ無りしよりの禮の上に珊瑚珠の念珠を無を言ゟて通りゟ常と將監事一を存知の儀ゟ八ハ言葉を無らしゟ於て前ゟて討死仕ゟと義りゟ將監申ゟ

小笠原伯耆入道宗家休覺書

一 忠朝の出馬せしとき家写衆すまひあ
る事二度よりおよひ申る忠朝怒り
てくつわをきり〳〵と知しる哉と
きこ宅軍会藩馬の脚ありなる
ゝ忠朝ゝ五音あしられふりあを
むひ〳〵志のひの徳を結ひ切なり
顔色甚たる氣ゑよておしやゝ

を時ハ軍会藩いさめていたくかな
らす〳〵猛武者の振舞あるへきす
とヤなれハ忠朝あき笑ひて念な
やおよとゝ内よ一むちくれて
すみしゝハ後者も同しく續き
ゝり 九六発動記

一本多出雲守ハ去年冬市陣の刈仕
ゑ口の儀につき

大御所様に機嫌損じ親中納言
はいさやうよいあるまじくなと仰
られしを深く心底よこめに陣
引に以後知行を大坂表へ悔りしても
不機嫌に居しまし処に又中妻に
頂き大坂表の儀をやかくと風
説あり此みつき弥事幕り去年の
通りに出動座をも拒いさるよをいて

八月朔日討死を遂くべしと思ひ定め
居しまし処に二度に俄と見あり
陣觸よつき本望の至りと存じ
あり大坂表へ着陣被され六日の暮方
舎兄英濃守道明寺陣所へ見舞
英濃守へ対面なくして物の平郎
甲斐守能登守三人を芝堤の上へ呼出
し今城方の毛利真田をハ如何して

当年より八討当中さすやはり多家の
名誉と存ぜらるるより向後とても武篇
の儀八祖父中務殿の弓矢形儀を学
ひやさるる儀肝要にはとて美濃守陣
場にて酒筒を取寄何とぞ二人
の聞を盃を取かへし矢尾の陣所へ
帰りやされはる処に本陣より呼させ
まはらるにつき急き糸上被されはい

異山表の儀先年ハ儀ハ加別能為者へ
仰付られ其方儀ハ元亨寺ハ屋敷
彼邊へ押詰め面々へ美濃守殿へ
仰渡されはるつき異まり存ぜる旨
申請やハ陣所へ居陣り家老小姓勘
解由を始め各を召出し右上意の趣
をやハ聞せ大きに喜悦はとあり時に
勘解由やハはハ明日ハ一戦の儀まつき

秋の夜夢ニ一人あり一の仕合まて
討死二の仕合まて一番槍ニの仕合み
て言語の任居まて山と中山へ出雲
ちとくの言葉ハ是かく打うなき
居中されはよしと思る内ハ夜も更
はつき相備の秋田城之介真田河内
松下石見六人衆庫裏浅野弥女柳村
主膳ハ方へ追打出撃あるべ敵

ろくき吉中遣ハし出雲ハ支度を
調へ矢尾を打立夜の四に四里ハ
及ふ道を神明ハ夜明ハ越前
家の者共の備へハ相並ひ彼居中
されはと有り　異本落穂集

一　小笠原兵部大輔秀政密ハ忠朝ハ
陣ハ来り我今日若江の小岩村田ハ
をいて木村主斗沢ハ兵を討たを

榊原康勝は先を蒐られ遺憾に堪へず此事両人の言聴き達せず我情慢なる事は明らか先年
きろといへども胸中を聞き且諸人の思ふ所も我思ふ如くあハ悲す徒に明日死戦して衆を償ハんと欲すと語る忠朝是を聞き我も去冬志貴地ヨリ陣を張しに前ヨリ大沼あり進まれすして先を
るに
大御所ハ出雲ヲ戦場を嫌ハ亡父忠勝ヨリ劣れり忠勝ハ戦に臨んで其場を嫌ハすと宣ふ且我系勤のとき土産として籃魚を献す老臣軍共のいとく先年献せしも蠟燭ハ
市感もあるせらるあれハ是を献し

徳川と云急ない調ハすと答へ
よ本多正純是を聞きて納戸より書
を借り軟禁しと云ふ即ち是を軟
禁
神祖悦ばせ燈させたまふ蠟燭甚流き
たるを見させられ忠朝の父忠勝ハ武
勇のくすすぐ此の如き小事なれを
盡して越度なき者なり忠朝ハ父よ

似すと命ありとなり我此二事尊
慮よ遠く事今日ハ為るまじ如き意を
を後悔す因て明日ハ殊よ忠勵み
罪を償ひ欲す然くハ五よ死を
以て快く勇戦すべしと密よ告
く仏中ハ戦死と決し暫時後
て相別る 大三川志

一 五月七日早元よ本多出雲守忠朝ハ組

茶磨山下へ押出し右はハ四十間許
の深田左はハ小高き畠を請て忠
朝必死の覺悟たるゆへ他の侍より
殊ニ出張し競ひたる所へ安藤常力
弛素ノ侍を出し過せしより各め
れい忠朝ハ出たる侍を引入（きこや）
外の者を出されよと云ふ（同朝大業廣記 大坂ノ陣覚書）
一七日天王寺表敵味方互ニ相支ル内
に本多出雲守より疾飛を陸ニ
張出是を見て越前勢ハ
を出す可家四五騎馬ニ乗を掛け
ル水理田向方見て大和組先を
も馬ニ乗ハ二人も二人（元越前）
同前に出ル（と不知ハいとも大和組）
の先ハいまし馬ニ乗を出し不申ル
本多出雲守不知ハ最初ハ馬ニ乗

を出し申其後まもなく西へ家老
小建勘解由申ハ何とて只軽を
かつぎ入り来立申、只今突出し申へ
しと云出雲方殊の外いきれて耳も
聞入れず我次第なりと云勘解由
此口脇の黄なる人の何を申存知よ
と申朝夕加藤忠左衛門進出候ハ此
是軽俗ハ軍ハ後より見くまて只国元
大変喜ぶて庶物のせこの立板なり
あれよ見えたり是軽ハ我と今是軽
まて申あまこと本の俗ハ知らず
き出雲方立腹して中ハ黄なるとハ
何の事そして長刀を持てかり勘
解由ハ只今討死し申目よ越へしと
言りて右の方へひき行加藤忠左
衛門ハ近なれハ出雲長刀の石突まて

却大刀ようまを忠左衛門るうたをき
蒔まれ腹を立只今討死して見せ
ゆゝとて先立此内出雲侍ハ横陣
より立皆馬を引寄置を出雲怒て
已等ハ馬より寄りて逃んゝ為ぶとて
長刀よりて後陣へ押かけ後毛利
勢亦右組黒半月一枝の差物にて
四千餘兵噇と押寄るゝ

折柴を形相形有り相際廿間とみ
れとも後ニ写を打よ四十間有り
物際よりハ遠しく必ず近く見る
もの有りと窪田伯十郎相語有り
と故久安三年薬師寺語有り常山紀談

大坂市陣覚書

一本多出雲守忠朝ハ兜角戦死と思ひ
定めし所ゟ森忠政後ゟ勝永既ゟ

近くと押借られ、雲州八日頃の俄練
此時ありとて小性共まて先へ出し
鉄炮をうつさせ居候而も元
来如別たる勇將鉄炮一つ二つ打
込と其まゝ関を揚て突くる時は
雲州家臣之宅軍兵衛一番首を
とる期て雲州北之輕七十餘人相
倒され殘る源平鉄炮うむとて
出るとき小性一つよりて服侍へ前
くる者弟ゝ人数二つよられて雲州
俄の左右より突くるときた俄の
半腹にて忠朝家臣久保田伝十
郎大原西右衛門押田左弓奴山本
唯右衛門原田四郎兵衛太旗本浪人
柳原加兵衛群をなれ進み出て
一戦仕らんと名乗る時分小鹿主弓

紫母衣まとて河原毛なる馬に乗り白
旗を振て若武者とも疾く早きそ
まく鉄砲を放せよとて知られ一
騎敵味方は疾く作て無る真中を
突破て通る右は五人立こさへて疾
を合せ乗り敵かくまて相俵の秋田
六位松下柱村主藤淺淵米女三須賀
摂津守俵を退き亦る越前忠直卿
の備へかくまる右の方真田河内守
俵もまく前まで出雲守忠朝は大よ
怒りて百里と云馬に乗りて只一
騎俵を乗板進み出れい馬上にい
大原作左衛門一人徒侍共十人ばか
り先に後ひ忠朝家老小野
勘解由其間をたり先まて大勢と
戦ひ危きを見て忠朝あれ助よと

下知し申候は歩卒六七人ばかり且一助
申候内よりそや勘解由い殿玉より上り
歩行侍ら五人ハ討れ二人ハ手負ぬ
時に忠朝ハ出雲守ありのせ
と呼ハるを聞者番組の中川孫兵衛
両宮侍右衛門徳永甚左衛門等七八人
今呼ハるハ大将なるあますなと切かゝる
雲州枯草を呼ともかゝれ数箇
のありしを押とり引上より二人突伏
る所に紙の羽織着たる是拙二間ばかり
隔よせ鉄炮にて雲州の胸の上を打
れとも元来不死鳥の大力猛将なれ
ハ聊痍まず刀を抜て馬より下り
立彼敵を切ふせ引に其跡口比の
持せたる筋金入の大鼻唇を引の
ロ一人枯草忠朝則ち是をとりて

たのまに持刀を右より拔七八人まで
敵を追散さんと働きられとも大
事を負たる上より疵創数多かり
ありけれハ敵を追ふに溝を越うて
倒まし〻ハ敵兵うへして忠朝ら
首をとるへしと集りしに大石作
太夢これを取せしと若戦を
とも大勢蔭重り大石も討れ忠朝

首ハ秀頼の輕卒沢雨森伝右衛門
取大石ハ忠朝の死骸へもたれかゝり
戦死をとけしこそ勇こしく見へ
忠朝彼ふて見を知らすして敵の
うしろへ切ぬけ城際まて家入時
忠朝戦死とさゝて引うへし合戦場
へ退き引 續武家閑談 太平雑話 國朝大業廣記

一 本多出雲守も深手を二箇所蒙り

おそれたのまれて己の鼻柿を引
さけ右の手より刀を振上げ逃げ敵を
追かけ中として溝の中へ倒るを負の
儀おれい起兼中されぬ而敵ハ立
帰り首を取て跡うしろ出雲方首を
ハ江の腕ぬきるてり鼻をそき
て田の中へ捨置ふを翌日の晩方出雲方
家中より又もの取上持帰りしよう　異本落穂集

藩鑑巻之百二十一目録

ほ部二十二

本多能登守藤原忠義

同　能登守藤原忠常